

# 校長先生の初恋物語

## 第22話 どうくつの中で見たもの

辺りは暗くなってきました。まだあの子は出てきません。

「どうしようか。大人に知らせた方がいいんじゃないかなあ。それとも、けいさつかなあ・・・。」

弱虫とっくんが2人にていあんしました。でも、2人は、ちがうことを言いました。

「そんなひまはない。もう1時間くらいたっているんだから、ぼくたちが中に入って、助けてあげよう。」

足長君がそんなことを言い出すんです。反対しましたが顔は行く気まんまんです。きんに君まで、

「そうしよう。いざとなったら、ぼくの空手で、ガブをたおすだちョー。まかせるだちョー。あちょーー。」

とわけのわからない空手のポーズをとります。とっくんには、2人を止めることができませんでした。

3人は、ガブと戦うことになってもいいように、公園のトイレの中にあった、バケツのふたや、デッキブラシやほうきを持ってきました。そして、ガブのすみかにおそろおそろ近づいていきました。

ガブのすみかの入口まで来ました。ほらあなの奥は、まったく何も見えません。真っ暗です。そこで、3人はもめました。

「ねえ、だれが先に入る？」  
とっくんはいいだしっぺが足長君だから、足長君が行ってよとお願いしましたが、足長君は直前にびびっていました。だったら、空手をやってるきんに君でしょって言ったら、きんに君も先頭はいやだとだだをこねました。まったく2人も、いざって時にあてになりません。それどころか、2人は、

「とっくんは小さいから、ガブに気づかれにくい。とっくんを先頭にしていこう。」



と言い出しました。いざとなったら、とっくんをぎせいにして、2人はにげるつもりです。でも、仕方ないから、とっくんが先頭になって、真っ暗なガブのあじとに入っていました。

明かりなんて当然ありません。本当に真っ暗な、黒の世界です。耳を澄ませてみても、音もしないし声もありません。ガブが骨をばきばきかんでいる音がないことには安心しましたが、もしかしたら、食事が終わった後かもしれません。おそろおそろ、声を出してみました。



「おーい。だれかいますかー。」

なんのはんのうもありません。

くらやみにだんだん目がなれてきました。ほらあなの中のようすが、じょじょに見えてきました。入り口はそれほど大きくないのに、中はいがいにも広くておどろきました。でも、とにかくがまんできないのは、においです。ガブのにおいがぶんぶんします。とっくんは鼻をつまみながら前に進みました。一番後ろの足長君は、時々、「おえーっ。おえーっ。」とやっていました。

「ねえ、さっきの子。どこにいるの？」  
とっくんはふたたび、声をかけました。その声はほらあなの中ではんしゃして、ぶきみにひびいています。反応はありません。

「この感じだと、ガブはいないみたいだちョー。ガブがもしいたら、とっくんの声に反応して、とっくんをかみつきにくるはずだちョー。」

たしかに、その通り。ガブはるすのようです。安心しました。でも、気になるのは、あの子です。あの子のけはいもないのです。

「もっと前に進んでみよう。」

3人は、さらに奥に進んでいきます。

しかし、3人はそのあと、おそろしいことに気づくんです。なんと、3人は、ほらあなの一番おくまできたんです。もう、これいじょう進むことはできません。つまり、あの子は、このほらあなの中で、消えてしまったということです。

### 次回予告

### なぞの転校生

